シセロ通り



ママがパパの悪口を言ってた。

聞いちゃったんだ。あんなに、パパは素敵だって言ってたのに。

私はどうしたらいいか分からなかった。そんな気持ち、知らなかったから。だって、ママにとってパパは、私にとっての保ちゃんでしょ。保ちゃんといるとき、信号で待ってるとき、手をつないで、待ってるとき、ひっついて、待ってるとき、顔をみてたら、信号がまた、赤になって、また待つんだよ。そうしたら、小さなお花をみつけて、おそらのいろに少しみどりがまじってるのもみつけて。わたしと保ちゃんがそれぞれ見つけるの。そして信号をわたって、ずうっとその話をするの。そうしたら信号が、なないろにひかるんだよ。

ばかとか、わかんないとか、みんな言うんだよ。ママでもパパでも、わかんない。でも、保ちゃんにだけわかるの。違うところに生まれて、違うところで暮らして、違うものを食べて、違う景色を見て。ぜんぜんちがうのに、ふしぎ。こんなにすごいふしぎがあるって、みつめたら、ぜんぶのあたりまえがふしぎになって、ほんとうになるんだ。鍵がひとつにしかあわないのも、お月さまが消えてまた見えることも、信号がお花を見つけるのを待ってくれることも、夢のなかでまた会えることも。そういうとき、大好きって言うんでしょ。そういうとき、一緒に暮らすんでしょ。そういうとき、みっつになるんでしょ。

大好きな人をわるく言う気持ち、なんなのかって、わかんなかった。

今日もパパの家に行った。パパの家はきれいで、ものもたくさんなかったけど、パパの残したものを一つ見つけては、なんだろうってママと話すんだ。昨日なんか、写真がいっぱい出てきて、ママが喋れなくなっちゃって、早く家に帰った。

今日、ママが指輪を見つけた。

”私のつくった指輪！”

私が言うと、ママがほほ笑んだ。

――死んでもまだ、私達を傷付けるの？

言葉がチカチカして、私はまたわけわかんなくなっちゃう。

――どうして、どうして、どうして？

わんわん音がひびく。細い細い何千もの針が、空から降ってきて、部屋の中で聞いている、そんな音。どうしてって、私の口からも出そうになる。

そっか、ママもわかってないんだ。

パパの家から出ると、びっくりした！　おじいさんがいたの。扉の前で立ってた。ぶつかっちゃうんじゃないかってくらい、近くに立って。

おじいさんはキャンバスを、ママに突き出した。

「シセロ通りで見た」

私はおじいさんの方が気になったから、おじいさんを見てた。くしゃくしゃで、くすんでて、浮浪者か乞食(どっちも一緒！)みたいだったけど、立派な人だってわかった。だって、髭も、鼻も、指も、袖にも、絵の具がついてたから。

ママが言ったんだ。神さまは絵描きだって。ママはずっと昔からそうだって思ってたけど、誰にも言えなかったんだって。でもついこの間ほんとうだって信じたんだって。その日の朝もらったばかりのお金で買った、ボリスの真っ赤なシルクスクリーンを眺めながらすごく嬉しそうに話してた。夢を見たんだって。

その日は真夜中に目が覚めて、雨の音を聞いたんだって。そうしてまた眠ると、手が真っ赤に染まった人が立ってた。ママはその人に近づいた。怖くなかったんだって。ママがその人の手を取って顔に近づけると、鉄くさい血のにおいはしなかった。その手からママの手へ腕へ、赤いろが膚から沁み込んでいった。ママは不思議と元気になった。身体のなかに火の玉がひとつ、ぽうっと生まれたんだって。

その人の後ろに、パパが眠ってた。ベットの上で眠っているのに、まだ眠り足りないって、疲れた顔で。そばにあるコップの口から、色とりどりの錠剤がぶくぶくあふれて、床じゅうにぼとぼとこぼれてたって。

ママがパパに電話するたび「薬を混ぜて飲まないで」って話してた。危険だからって。でもパパが見ていたのは薬でも危険でもなくて、石の足場だった。パパが私に教えてくれた。生きることは誰もいない湖の上を歩き続けることだって。

パパはずうっと湖の中にいたんだ。そこでずうっと眠ってた。でもあるとき目が覚めて、湖面に向かって泳いでいった。なにも知らないのに、身体がそっちへ行くんだって。

湖の中にいることも、湖面があることも、その外があることも、なんにも知らなかったって。でも心がどんどん膨らんでいくんだって。空だ、空だ、空だ、って。空が何かも分からないのに。

パパは湖から顔を出した。なにもなかったって。

パパは湖の外は、湖の中と何も変わらないって言ってた。自分は本当にひとりなんだって。ただそれを知るためだけに、出てきたんだって。湖の中は涙でいっぱいでわからなかったけど、そうしてはじめて、自分が眠っていたことに気が付いたんだ。

でもパパは空を見ることはできた。湖面を歩くと空の色が変わるの。湖面に向かって泳いでき

たみたいに、しらないうちにずっと歩いていたんだって。

けどパパは空を見ても、なにも感じなくなった。そうしたら身体がどんどん沈んでいくんだ。何も感じない空の色だったけど、パパは空が自分を見ているって知っていたから、まだここにいたいと思ったんだって。だから足場が必要なんだって。

ママがこの血はあの人にあげてと言ったら、その人はなんにも言わなかった。でもママはその人が何を言っているのかってわかったんだって。

”いつでも、いつでも、注いでいるよ。そうでなければすぐに消え去ってしまうよ。地図があるのはどうしてだと思う？　どこにも道なんてないからだよ。”

その人はひと言も、テレパシーもなかったけど、そうだってわかったんだって。神さまはぜんぶの人を、動物を、草を虫を、一枚一枚、毎秒毎秒、描いているんだって！　やっぱり神さまって、すごいんだね。

でもすごく大変そうだねって言ったら、神さまは愛の大きな器だって言ってた。風も、春も、全部描いてるんだって。風も季節も生きてるんだって。だから風が止んだとき、風が死んでしまったんだって思ったんだって。そう、ママが突然元気がなくなったから、なんでって聞いたんだったっけ。

おじいさんはママに渡してすぐ、とことこどこかへ行っちゃった。でもママはそんなの知らんぷりで、絵をずうっと見つめていた。私は絵をのぞいた。その絵の中にはピエロがふたりいた。大きなピエロと小さなピエロ。ふたりは手を取り合って、踊ってる。踊ってるっていうにはちょっと静かすぎるけど、ふたりは確かに踊ってた。

家に帰るとママはベッドにもたれて絵をずうっと見ていた。私はママを、ほっといた。私の切り絵をみたら、きっとすごく驚くだろうって頭がいっぱいだった。でも思ったようにいかなくて、いつもならそれでもずうっと続けてるけど、やっぱりママが気になって、それどころじゃなくなってきたの。

ママはやっぱりまだベッドにもたれてて、絵を見たまんまだった。私がママにくっつくと、ママがこっちを見た。ゆっくり。私を見たママの顔、じゃがいもだった。掘りたてのじゃがいも。ほくほく、つちだらけ。ふた筋の跡があとかたもなく土を洗い流していて、その先に、びーだまがふたつ光ってるの。

ママが指先で絵をなぞった。大きなほうのピエロの目。眠そうなその目。

ママはパパの悪口を言わなくなった。いいことも、言わなくなった。パパのこと、なんにも言わなくなった。代わりに、うたを歌った。カーテンを開けて、ハーブのお茶を淹れて、本をめくった。

ママの隣にパパがもどって来たんだ。

煙のなかに何が含まれているのか目を凝らす。目を凝らせば妖精が見えるって言ってた人がいた。悪いけどその挑発には乗らない。鳥が子供を崖に誘う悪戯だ。

こめかみにあてていた手をゆっくり後頭部へ滑らす。縛られた髪の余りの手触りの悪さに夢中になって撫で続ける。これは窓に映る不細工をまじまじと見てしまったり、不味い料理こそ味わって食べ続けてしまうのと似ている。

一時期髪をサラサラにすることに凝っていた。一本たりとも絡み合うことを許さない風紀委員下っ端の如く髪達をプロテクトし柳の高潔さを教養した。だが今はどうだ。しかしこれは乱交ではない。乱交は皆がしたいものでも日常に持ってこれるものでもない。というかキタナイし疲れるではないか。そういう概念がないアブラナ植物であっても交雑するには時期がある。どちらにせよ需要は高くないのは明らかだ。だから髪が毎日一様にそんな体装をするはずがない。つまりここは実家なのだ。私の頭に散らばっているのは蜜柑であり炬燵であり安心と平和だ。もし私の髪を見てその生き様を乱交だの言う輩がいたら蜜柑を分けてやらなければ。

あ、と身体が重くなる。芋づる式で想起されたあの日の感覚は今現在の日々にいとも簡単に共振する。あんなに夢中になっていたことが全く下らないことだったと気付くのは辛い。下らないゲームを毎日毎日繰り返していたということに気付いた日々は、全てがそうでしかないという感覚は、辛いとしか言いようがない。死んでも繰り返されるのだ。延々。

しかもこの身体が類稀なものであるとも分かっている。私には選択権がある。豚だった頃には望むべくもなかった、目も眩むほどの選択肢が。でもどうしたらいいのか分からない。十余年の生で初めて実験室から出された猿は仲間とともに空を見た。最初は長く歩くのが難しかった彼女も、仲間に連れられ樹の前に辿り着いた。だが一人で外に出されても、どうしたらいいのか。

私は煙の跡を追った。唇から喉へ、肺へ満ちる煙のひとつひとつ。びりびりと作用する微かな痕跡。

煙草はやさしい人がするものだと思っていた。依存状態を形成することで、日中に気孔を閉じる多肉植物のように外界との扉を閉める。そして来る夜の時間、煙草によって扉は開き、感覚を取戻す。喫煙は人間砂漠の中で水を蓄え、生き永らえる行為なのだ。

確かにその作用は私にとっても必要なものだった。しかし私はそれ以上に、その動作が好きだったんだ。

私は動作を愛している。動作は時そのものだからだ。私達が動作を忘れれば、私達は時間に追われ、時間に退屈する。煙草は時を誇張する。芽蔵で摘拇な私にさえその捉えどころのない姿を輪

郭をはっきりと示す。次の瞬間にはその輪郭が消え、自分がその中に案内されたのだと分かる。二点を結ぶ対極概念の直線で圧し潰されていた自分が煙によってぷくーっと膨らむ。

というわけで雨によってできたこの暇にじゅうぶんな空間と落書きが生まれたわけだ。同僚が傘を渡そうとしてくれたが断った。理由はないけど今日は要らないと思った。

私は背負っていた鞄に煙草をしまい込み、煙草の五分の一の値段で購入したインド製のチャック付き布袋の中身を確認した。よし、あるある。

風が強い日だ。雨が四五度に天と地を結んでいる。伐られる、と思った。ナノ繊維が私の身体をサイコロ状にカットするんだ、ゆで卵カッターみたいに。

よしと目を凝らして飛び出す。

ほら見ろ、妖精くん。君には見えないだろう、人間がサイコロになっていく様子が。

共同体が突如として国境線を引かれる。地だけじゃないぞ、空も、地殻も突き抜けて、あっという間にバラバラになるんだ。驚くことも忘れる異様な溶解力を持った透明で無味無臭な爆弾がその小ささを以て巨人の足跡の如く隅々まで打付ける。

私がひとつ落ちていく。もういいやあって落ちていく。あややや と有限に引き裂かれる。それは一雫の中に溶け、フラクタルとなって無限に増殖していく。ひと雫毎にある無限の集団は硝子の水滴が一つの私を反射するように同じ向きを見、雫毎に違う向きを見る。有限の中の無限にある私の中の、たった一つがある方向を示した。集団毎にバラバラになった私が一斉にその方向を見る。

見えないだろう、見えないだろう、バラバラになった人間が、まさに今人間をバラバラにした力で以てして、また一つに掻き戻る様子が。

扉を開けると傘が暴れまわって、男が殴られていた。何度も殴打を食らい男はもうどうにでもしてくれと言わんばかりに大の字に倒れ込んだ。しかし追撃は止んだ。暫くして男が上体を起こすと、傘が差し出された。男は傘で立ち上がってカウンターに着いた。

「たい焼き山盛り一皿」

「三倍」

「はあ？」

水色の ⊢ シャツに黄色いフェルトで清江と縫い付けられた服を着た豊満な肉体をしたバーテンが、男に念押しするように言った。

「勘定三倍」

男はカウンターから身を乗り出して一切の隙なくフィットする清江のジーンズのウエストを引っ掴んで溢れんばかりの腹肉を押し上げた。

「ご馳走しようか」
　私は男の背中に近付き、声を掛けた。
「五倍」
　すかさず清江は私に言い放った。
「わかった」
「たい焼きがさ、来たんだよ」
　男は私たちのやり取りをラジオのように聞き流して自分の話を始めた。
「そりゃもう突然にさ。突然というにはごく自然でまろやかにやって来たんだけどね。上品で礼儀正しい紳士が六階の窓から俺んちに入って来たみたいな。やって来た鯛焼きの御姿は水彩画のようにじんわりと現われて、ぽっと香が灯って焼けた皮の香りを残した。だけど、それにしてもこんな真夜中には、突然だ……六時には寝たい人間だから、俺は。でさ、知っての通りすごい風だろ。大降りじゃないにせよ雨も降ってるわけ。でもしょうがないからさ、出るわな。で、歩いていくには遠いし、車を呼ぶほどの金もないわけ。で、もらったばかりの傘を差して自転車を漕いだんだ。そしたらもうバッキバキ。昨日もらったばっかりなのに。濡れるわムカつくし寒いから扉を開けて手あたり次第この傘でボカボカ殴ってたら、やられた」
骨が捻じ曲がり四方八方飛び出した傘は千手の十字架のようにバッキバキだった。
「傘、かわいそうだよ。突然の文句も言わず身を挺して雨風に立ち向かったんだよ」
「あ、ああ」
　私は煙草を取り出して男の顔を眺めた。
「シセロ通りって知ってる？」
「ここだ」
　私は男を見つめた。
「ここがシセロ通りだ。正確にはこの下」
　男は煙草でカウンターを叩いた。私が煙草のことを忘れている間に私の指に挟まれていた筈の、か細い姿は消えていた。
「昔のここの店主がな、姫がいるって掘ったんだよ。穴を掘った先にいるって。赤い帽子の小太りの？　違うよ、ずっと掘ってたから身体もいいカンジに引き締まってて、髭もきれいに剃ってたよ。客商売だしね。だから、冗談じゃなくてね、本当の話なんだよ。休みの日は穴掘るか笛吹くかって状態でね。親父を殺すために地面を掘って武器を探した神の子供たちと似た気迫があったな。だってさ、考えてみろよ。人力で掘ってたんだぞ、あいつ。つるはしとかげんのうでさ。逃れることのできない肉体的疲労が”なんでこんなことしてるんだ”って正気に戻る瞬間をひと

時でも呼び覚ます筈だよ。でも一切何の疑いもなく掘り続けてた」

「わかる気がする」

「まじかよ」

　注文していないアルコールが来た。席料だ。けど飲めないから、コップを男の方へ押し付けた。男は周りを見渡し、同じカウンターの直線上、一人でピーナッツを食べている姿を見つけた。男はコップをその彼に向かって滑らせた。コップは彼の前ピーナッツを避け見事に通り過ぎ横転し、こぼれた。

「そこに鼠がたくさん集まってさ。地底人を呼んだり色々していたわけ。中には穴掘りを手伝おうとした奴がいたけどめちゃくちゃにキレられてた。現れる筈の姫が、”この穴を掘ったのは誰？”って聞くんだってさ。その時、”私が一人で掘りました”って、言うんだって。それだけなんだって。あいつのしたいことは」

　こぼれた飲み物を粛々と片付けているピーナッツの彼を肴に男は話し続けた。

「ただの横長の穴をなんでシセロ通りだなんて言い張ってるのか不思議でさ。でもそれを聞いた時もキレられた。”シセロ通りだ！”って。何回言っても名前を覚えない無礼な奴って無表情で睨んできてな。俺はその頃から理不尽って言葉の意味を知ったよ」

「大柄な男は来なかった？　亜麻髪の」

「ああ、見た。二メーターはあった」

「……」

「そいつのことはよく覚えてる。なんたって、そうだな。印象に残る奴だった」

　沈黙が訪れ、私達の間を別の話し声が埋めていく。木星を爆発させたらピーナッツができたんだって話。一つだったタンポポが突然別々の個にになってしまうみたいに、ばらばらに散ったんだ。宇宙中に散らばった木星の綿毛は、地球にも降り立とうと何万と試みた、しかし大気圏を越える火の禊に耐えたのは、百にも満たず、百の欠片はあらゆる海や水溜まり、葉や空き缶の隙間に落ちていった。でも欠片たちの中で身体を得られたのは、たったの一つだった。地球の生き方を知り喜びを見出した、その欠片だった。欠片は落ちて実る物語になりたいと歌をうたった。そうしてその実が初めて実るころ、今の木星が生まれたんだって。

「印象深かったって？」

「ああ、そうだよ。あいつは突然やって来て、転がってた空瓶を割った。そんなことする奴いないわけじゃなかったから、みんな無視してた。次は机にナイフを突き立てた。それも別にどうってことない。でも銃を置いた時は、流石に皆の視線が集まった。わらわら集まるバカの群れにあいつは言った。”このゲームに勝てば、私に何をしてもいい。どんなことでも。手をかけるのが

嫌なら、私に示すのもいい。なんでも、望み通りのことをする。代わりに負ければこいつを打たせてもらう。量は点差で決める。負ければ桃色の雲の上でひと時眠って、帰ってこられる。大負けすれば、そのまま帰らずに済むだろう”そいつはその名前を言った。みんなそれが何か知ってたよ。地上のあらん限りの至福の中で死ねるものだ。死ぬのが嫌になるくらいの」

　カウンターに山盛りのたい焼きが一皿、私達の前に置かれた。

「おおっ。量が倍だ！　もしかしてそーゆー意味？　でも勘定って言ったよなあ」

　私を一瞥した清江の動作を良い風に解釈することにした。

「でも中身が何かなんて食うまでわかんないだろ。粒餡じゃなくって挽肉が入ってて発狂しちゃうかも。だから、なんでもいいって奴が行くわけ。やるやる！　なんて行って、山桃があいつの前の席に着いた。ゲームのルールは”かんたんで、山札から一枚選んで、強いカードを持ってた方の勝ち。そんだけ。パーでもできる。でも問題はどのカードが強いかだ。点数の付け方はデタラメで、どのカードが何点かは隠されてる。最後になるまでわからない。”一枚選べばいいんだな”って、山桃はわりに真面目にカードを選んだ。引いたのはダイヤのエース。あいつはクローバーの三を引いた。点数表のシールが外されて、山桃の負けと分かった。ダイヤのエースがクローバーの三に負けるんだ、本当にデタラメ。で、点差は二十、ちょうどいい量だ。打たれた山桃が床に転がると、飴になって溶け出して、あっという間に綿飴になってふわふわ浮いていった。綿糸の隙間から覗かせた山桃の目を覗いて、これは間違いないってことで、俄然参加者が増えた。だけど二人目、三人目も負けたんだ。確率は二分の一の筈だが、あいつの全勝。四人目は自前のカードと自前の点数表を使って挑んだけど、負けた。五人目もそれを借りてゲームしたけど負け。だんだんみんな熱くなってきて、何をやらせようかって盛り上がった。真裸に逆さ吊りにして地底人を呼ぼうとかなんとか。その人柱の全身に電極を繋いで地底人と交信するわけだ。まあ変な奴ってのは案外優しいんだ。海岸沿いであったヒッピー祭りに行った時もそうだ。フナムシがわらわらいたけど、誰も叫びも怖がりもしない。フナムシは喋らない人間って感じ。トイレでバッテリーを充電しても、七日間の間盗まれることはなかった。そんなの当然だと思ってたけど、ひとつ隣の海岸、普通の人間が集まってる場所へ行ったら若い男集団がフナムシ見てキモイってキャッキャしてんだよ。花が美しいと思うあなたの心が美しいなんて歌があったけど、逆も然り。バッテリーもあっという間に盗まれた。でもその場所じゃ、ヒッピーの方が気味悪がられて、何故自分が生きていられるかも忘れた盗人を歓迎だ」

「裸で逆さ吊りもじゅうぶん残酷と思うけど」

「刺されるのとうんこ投げつけられるのとじゃ種類が違うだろ。KKK に潜入したと思ったら動物園だぞ。飼育員やらされてるんだ。哀れを通り越して滑稽だったな」

「なぜ逆さまにする必要がある」

「血流がさ、減るだろ。いままで地底人の目撃情報にはっきりしたのがないってことはハッキリ意識のある人間には関わらないもしくは関われないってことだ。もぐらみたいに全身で生きてたらさ、もっと別の交流方法があるかもって想像つくだろ」

「なるほど」

「わかってないだろ、わかるように喋ってないぞ」

「地底人はイルカに似てるってことだろ。結局逆さづりにはしたの」

「いや、次も負けたんだ。それも大負け。負けた八ツ手もまあ馬鹿なやつだったが、それが致命的な量だってことくらい、分かったみたいだった。八ツ手は緑色の破れたソファーを見て、あそこで死にたいと言った。ソファーに沈んだ八ツ手は電話したいって話した。あいつはつんぼかってくらいガン無視してぶっつり刺そうとしたけど、誰かが割って入って携帯を渡してここに録音しろと言った。こんな地下、電話は通じないからね。あいつは注射器を腕から引き上げて、八ツ手は携帯を手に取った。そして録音のボタンを押した。だけどなんも喋らない。一分ぐらいだんまり息継ぎだけして、切った。ダイイングメッセージかと思ったけど、相手がいなかったって言った。やっぱり、ばかだよな。なおさら死ぬことないのにさ。そんでそのままとろとろ眠った。幸せそうだった」

　私は締め切った部屋で山盛りの煙草の葉に火をつけて眠ったら、同じ気持ちが味わえるだろうかと想像した。

「嫌がったって、やってた。どんなに止められようと、あのボトルで銃で、殺そうって頑張っただろうね。参加したいってやつはぐっと減った。そこで現れた七人目は、遠目でバカ騒ぎを見てた理沙って奴。理沙は本物の武器が載った机の前に静かに座った。目が座ってた。これはと期待したけど、負けたな。理沙は打たれたあとすぐさま立ち上がって、シャンパンであいつの頭をぶん殴った。瓶って、割れないもんだよな。あいつは全く無抵抗に殴られてたけど、何回殴っても割れない。理沙は仕舞いにはシャンパンを床に叩きつけて出てった。血とシャンパンを滴らせて、尚もあいつは机に座った。でももう、おひらきだ。誰も遊びたがらない。観客は他のバカ騒ぎの中に消え、じっと待つあいつの足元には紙屑みたいにトランプが散らばってた。でもそこにひとりやって来た。か細い、幸薄そうな奴だった。死にたいから来たって感じの。あいつがこの鯛焼きなら、現れた奴はこの煙草の吸い殻だ」

　男は鯛焼きの皿の上に潰してあった、吸い殻いっぽんをつまんで言った。

「でもきっと、そういう軽さが人を導くんだろうね。勝ったんだ。あっさり」

　男が落とした吸い殻は、鯛焼きに当たって皿の外へ転がった。私は吸い殻を皿の縁に戻し鯛焼

きを拾い灰を払った。鯛焼きは水を含んでしっとりと、魚らしくなっていた。目を離した隙に逃げ出すんじゃないかとか、傘で殴られるんじゃないかと考えて口をつけずに皿に戻した。

男はターボライターを取り出して鯛焼きに噴射しようと試みたが、一蓮托生水浸しになった炎の矢は一糸たりともその姿を見せず、男は「焼き直してくれ」と叫んだ。やってきた清美はカウンターに拳を置いた。解かれた手からカウンターに置き去られたのは祭りから逃げ出しアスファルトの上で死んだ金魚の風情を醸し出す使い捨てライターだった。男はライターの横車を擦って、鯛焼きの皮をちまちま炙っては食べた。

「あーあ。まあいいや」

「だんだん魚に戻っているような感じで面白くない？」

「でも生き物はちゃんと〆てから食うもんだろ」

引き続き小鯛を炙りながら怪訝そうな顔で男は言った。私は自分のライターで男が持ってる鯛焼きを炙る手伝いをした。そして隙を見て男の指を炙ろうと試みた。何度か迫りくる火から指を避けた男は接近四回目に私の意図に気付き、私の脚を思いっ切り蹴りあげた。痛い。

「勝負に勝ったあいつは……シセロは、椅子から立ち上がった。そして座ったままのあいつを見ていた。どんなにでっかい獣でも、ちょこんと大人しく座ってたらぬいぐるみみたいなもんだね。そしてあいつもシセロをじっと見ていた。そうしてあいつは待っていた。自分に何がなされるのか、何が命じられるのか、待っていた。シセロはあいつの手を取って、立たせた。そして身体を引いて、鼻歌を歌いはじめた。一緒に踊れってことだ」

男は私の鯛焼きを取り上げた。

「シセロは人を笑わせるのが好きだって言ってた。そんな話誰から聞いたかも忘れたけど、確かにそういう奴だった。でもいつも上手くいかないんだ。良くて笑われるか、無視。ハブられ苛められ、殴られる。いるだろ、そういう奴。俺も似たようなもんだけど、俺は諦めてるからな。気持ち悪がられるのが仕事だって。でもその仕事に忠実に生きてたら、かわいいって言ってくれる奴が現れるもんだよ。俺の恋人は芋虫がぐにぐに身体を曲げて、無慈悲な獣が乗り回す道路を果敢に走っていく姿が好きなんだ……これも本当の話」

男は鯛焼きを腹と背中に分け背中側を私に渡し、最後の一匹の腹を飲み込んだ。

「目を見て泣いたのは、初めてだった。その時の感覚は、色々な経験から例えることもできる。音楽を聴いてわけもわからず泣いていたり、落ちていく陽をただ眺めたり。でも俺がそれを感じたのは、いつだって世界中のどこかの誰かが無数に経験してる、感傷ってやつだ。だけど、こちらを見ていない目、ほんの少し前に会ったばかりの男の瞳を見て、涙が出て止まらなくなるなんて、初めてだった。その時初めて気が付いた。俺が今まで感じていたものは、全てそうだったん

だと。俺は今まで無視し続けていた感覚を初めて見ようとした。そうしたら邪魔な声や姿が、消えていったんだ。観客のいない舞台の上で二人は踊っていた。じいっと見ていたら、動きがだんだんゆっくりになって、時間っていうのが、全くなくなってしまったんだ。やっぱりなにがなんだかわからなかった。けど、あの目は俺の目だと思ったんだ」

この人は息継ぎをしている。ふとそう思った。湖の底から引き上げられた男が、鏡面に口付けする。煙草に口付けしようとして気付いた。火も点けていない。

「机の上にはジョーカーが二枚あった。黒いジョーカーと赤いジョーカー。カードにシールは貼られていなかった。点数表を見ると、ジョーカーの点は隠されたままだった。シールを取ると、黒は０、赤は１」

　野太い腕が吸い殻だけになった皿を引き上げた。

「腕相撲」

「やめとけ、腕もがれるぞ」

　私が呟くと男は言葉を返した。私は鞄から布袋を引っ張り出し、その中にあった写真を取り出して男に見せた。

「この爺さん？　いなかったよ。そもそも爺さんなんて来る場所じゃない。わかるだろ？」

　私は昔話をした。私が二歳になったころ、私の父が死に、住いを別にしていた父の家を母と二人で片付けていた。ある日父の家から出ると、この老人が現れ、踊っている二人のピエロの絵を母に渡した。そしてシセロ通りで見たと言ったんだ。父の身長は 198 センチ……。

　男はさして驚きもせず言った。

「なあ、たぶんこの通りの名前みたいなもんだよ。どっかからやって来たんだ。爺さんのもとにね」

　私は写真をしまって、代わりに折りたたまれた絵を渡した。

　男は絵を広げていく。私は煙草を指先に感じながら、目蓋を閉じた。肺に煙が満ちていく。煙を吐きながら目蓋を開け、絵を見る男を眺めた。

　男の目はあの時の母と同じ目をしていた。